

名誉博士号受賞記念講演

“共に生きる”

ダト・パドゥカ・ハジ・モハマド・ハジ・アダナン・ビン・ブンター

Dato Paduka Haji Mohd. Adnan bin Buntar

2009年10月20日
香川大学

本日は私にとりまして、また私の妻をはじめ家族にとりまして最も栄えある、そして歴史的な日でございます。私は本日香川大学より名誉博士号を授与されました。しかも香川大学と香川医科大学(現在の香川大学医学部)が2003年に統合されて以来、初めての名誉博士号でございます。この栄誉はまた大使としての私のキャリアのなかで最も偉大な功績であります。私はすでに退官しておりますが、香川大学とブルネイダルサラーム大学の長きにわたる相互協力関係の始まりにあたり、名誉博士号を授与されたことは時宜を得たものでもあると存じます。この栄誉は4年前に両大学間で開始された緊密な交流、協力関係の象徴でもあります。私に賜りましたこの名誉博士号はブルネイダルサラーム外務貿易省にも贈られた栄誉でもあると思います。なぜなら、駐日大使在任中の私の取り組みに対し御校の評価をいただき、名誉博士号授与という栄誉に恵まれたからでございます。

この栄誉を賜りましたこと、そして同時に、未来の世代のために香川大学がブルネイダルサラーム大学などとの協力協働の重要性を理解されましたこと、その先見の明に対し、心より感謝の意を表したいと存じます。

またブルネイダルサラーム大学、教育省、保健省、その他関係機関にも謝意を表します。進んで香川大学との協力協働を受け入れ、交流を進めていく広い視野がこうした機関になれば、本日のこの栄誉はなかったことでしょう。

また、私は両国に奉仕する機会を得ることができたのは外務貿易省のおかげだと感謝しております。そして日本に資する活動を行う友好国を常に支え評価いただいた日本の外務省にも謝意を表します。

大使在任中、私は何度も香川大学を訪れ、そのたびに、御校、とくに医学部の趣旨とビジョンを学び理解する機会を得ました。米国や英国などの地域に大学を開き、学术交流を進め、とくに人間に関連のある分野において増え続ける問題に対し解決策を見出そうとする国際化の姿勢に私は感銘を受けました。御校が現在すすめておられますこのネットワーキングは様々な意味をもつ奥深いものです。良いことだけでなく、その逆も見出すことを可能にするものだからです。原因や発生の理由を理解してはじめて、私たちは病気を治すことが、また治療法や、状況の改善をはかることができるのです。

私の心に浮かぶそうした状況のひとつは、恐らく、今日の世界の矛盾と複雑性でありましょう。新技術と通信技術の進歩により、私たちの世界はますます小さくなっていますが、同時にコントロールの難しさも増しています。裕福な国とあまり幸運ではない国が混在しています。清潔で健全な環境に暮らす人々がいる一方で、今も辺鄙で開発の遅れた地域に暮らす人々がいます。豊かな暮らしに恵まれた人もいれば、日々の基本的なニーズにも事欠く苦境に暮らす人もいます。他国と共存できる国とそうでない国。

人類は月に行ったこともある一方で、いまだ都市を見たこともない人々がいます。夜、熟睡することができる人が存在する一方で、戦争や暴動による騒音で眠れない人もいます。実に多くの矛盾が存在しているのです。このような世界になるはずだったのでしょくか？この世界はいつまで生き続けるのでしょくか？であるとすればこの世界とは何なのか？国とは何なのでしょくか？

私は、世界は人であると思います。なぜなら人が国であるからです。これはまた、国が世界であり、したがって、世界が人であることを意味します。この世界、すなわち人類を救うために、何を私たちはなそうしてしているのでしょくか？

それぞれの状況、出来事に対する考え方はすべて異なっています。ある人にとっては正しいことでも別の人からみれば間違っている、そしてその逆もあるのです。過去においては正しい行為であっても、現在は間違っていることがあります。その逆もしかりです。世界全体に対する共通のビジョンが私たちにはないのです。人を思いやることなく自分一人で生きていきたいと誰もが願っていることはあるかもしれませんが、それは不可能です。世界は、生きていくにはとてもとても複雑な場所と化しているのです。しかし、私たちに選択の余地はあるのでしょくか？

ですから、この世界を大切にしなければなりません。どこから、どう始めればいいのでしょくか？まるで悪循環のようです。その循環を断ち切る最も適切なポイントはどこなのでしょくか？政治家はビジョンがあり、エコノミストは自分たちの経済理論があり、環境活動家には自然と歴史があります。これらのことが全て政府の政策やビジョンに収斂しているのでしょくか？食べ物やエネルギー、人材などの資源はどうでしょくか？主権、安全保障問題につながる境界の問題はどうするのか？あげればきりがありません。

どこから私たちは始めるのか？最初から、できるだけ早く、つまり萌芽期の時期、次世代と大半のひとは答えるでしょくか。つまり、次世代が母親のお腹にいるときから次の世代を大切にしなければならないのです。母親の医療を充実させ、赤ちゃんが健康に生まれるようしなければなりません。そして、この世に生まれ

出たあとも、子供たちが適切な教育を受けるよう親たちが導くことが重要なのです。

次に子供たちが世界に向き合う準備をしなければなりません。なぜなら先に述べましたようにこの世界は試練に満ちているからです。これは優れた教育を意味します。教育によって次世代の人々が社会的な生活を送り、国家に貢献し、近隣国と共存し、また他の国の人とも共存することが可能となります。ですから、教育は国家の発展という国内の目的に沿うものだけでなく、国際社会も視野に入れたものであるべきです。言い換えれば、国家としての国内ニーズを満たすための国内カリキュラムと国際共存を目指す国際カリキュラムの両方が必要なのです。

したがって、自国だけでなく国際社会に責任を有する国際的な視野をもった若い人材を育成するのであれば、教育制度のなかに、国際的要素を含んだカリキュラムが必要となります。まずは、個々の国家のニーズを検討し、次に地域のニーズに配慮するのです。例えば、東南アジア地域ですと、この地域に必要なのは地域共通のカリキュラムです。そのカリキュラムを通じて、お互いの違いを理解し、そこから文化、歴史、開発の点で東南アジア地域を、そして各国の何を指しているのかを理解することができるのです。このような東南アジア地域内での理解の次に必要なものは地域間理解です。例えば、東南アジアと中東、あるいは、欧州などです。こうした国家間、地域間に共通の地域内、地域間カリキュラムが必要なのです。

このようにカリキュラムが一部共通化することがひとつですが、ではこの制度を実施し活用していく上で、互いに交流し合うシステムへのアクセスの問題があります。どのような仕組みを利用するのかという問題です。地域カリキュラムの部分的共通化というこの偉業を達成するための媒体、メディアを私たちは持たなければなりません。それは言語以外の何物でもないので、ですから外国語教育が若い世代にとって非常に重要であり、それはまた来る試練に立ち向かう十分な準備を行うことにもなります。言語を通じて、人はある国家に対する深い知識を

得ることができます。また、国民、文化、信念、国民の願望、その感性を理解することができるのです。そうすれば私たちは隣人と共存することができます。互助精神のもと平和に暮らすことができるのです。このことを非常に早い時期から若い世代が意識できるよう私たちが手助けしなければなりません。マレーの諺にもあります。

もし折れないように竹を曲げたいなら、若芽が出た時から始めないといけないという意味の "Kalau melentur buloh, biar lah dari rebong nya" です。

この地域そしてこの世界で起きていることを若い世代に理解してもらいたいのであれば、この諺を実践すべきです。コスモポリタンな国々を若い世代に経験させ、多民族環境での生活がどのようなものか理解させれば、彼らが国家を動かす時代が訪れた時に、外国の感性を考慮するようになるでしょう。そうすれば、隣国も受け入れることができる政策をつくり、富める時も苦難の時も協力し合い、知識やノウハウを共有し、研究開発の面で協働するようになります。そのことが、人類をそれぞれの責任において貢献しうる存在とするのです。

つまり、私が申し上げているのは、若い世代に国際的な視野をもたせ、世界、とくに自分の地域で起きていることを認識させなければならない、そして責任もって知識面で貢献する、思いやりのある世代を育てることが必要だということなのです。このような世代を育成することができれば、次に、彼らもつ知識、目的、ビジョンを実行に移し、必要とする人に発信する仕組みを考えなければなりません。

国家間の外交関係は国家間の多々あるコミュニケーションの一つであり、通常、大使館、領事館、名誉領事館を他国に設置、あるいは相互に設置しています。

要するにこれらは政府の口であり、目であり、耳であることは、私たちはよく知っているわけです。しかし、大使館は、これ以外に、多くの分野でまた他の手段による人と人との交流を通じて、2国間関係を緊密にする独自の取り組みも行っています。

非政府組織は、国連、その下部機関であるユネスコ、WHO、ICAO(国際民間航空機関)から ASEAN, GCC(湾岸協力会議), SAARC(南地域協力連合)や国際交流基金のような国内NGOまで多数存在しています。こうした機関が、労働、保健、教育、文化、経済など多岐にわたって活動しており、若い世代がそこに応募し重要な役割を担うことができます。

日本はよく知られているように米国に次ぐ世界第2の経済大国です。その日本を東南アジアは幸運にも域内に擁しています。

なぜなら日本の発展が近隣諸国に浸透するトリクルダウン効果が起きるでしょうし、先進技術、開発、環境、安全保障など日本の繁栄を相互利益のために共有することが期待されるからです。この点において日本が疎外されるはずはないと思います。では私たちは日本から何を期待できるのでしょうか？私は基本的にはすべての面において期待できると思います。政治的安定、平和、文化、モチベーション(士気)、経済、教育、そして理解など日本の能力、手腕すべてです。

こうした面での共有は政府間を通じて、そしてまた機関と機関や人と人などの非政府レベルでも可能です。

日本はASEANの対話パートナーの中でも初期からのメンバー国として、ASEAN地域やまた個々の国々に多大な貢献をされています。また、JICA, 国際交流基金などもその一翼を担っています。日本とブルネイダルサラーム国は友好関係を築いており、目的の全てではなくとも、さまざまな事業で協力し、達成してまいりました。日本は、ブルネイダルサラームにとり経済のパートナーであり、ブルネイの液化天然ガスの輸入国でもあります。東京の電球4個のうち1個はこの天然ガスで光っているのです。また、日本は技術支援や留学生への奨学金支給、そして東南アジア青年の船、日本東アジア学生青年交流ネットワーク、福岡アジア太平洋子ども会議などの事業を通じて多くの学生交流を実施されています。こうした事業は我が国だけでなく他のアジア太平洋および東アジア諸国を

も対象とするものです。成功裏に実施されており今後も継続することを期待しております。

次に香川県とブルネイダルサラーム国について、香川大学、ブルネイダルサラーム大学および保健省の観点から申し上げますと、私は両大学の交流が特に医学の分野で発展していく様子を駐日大使在任中見守ってまいりました。2005年9月から2008年10月までの期間です。この関係は互恵的に成長発展しさらに深まりつつあります。そしてこれはまだ始まりにすぎません。この有望な関係は今後他の専門領域にも拡大すると確信しております。これまでも、香川大学医学部、ブルネイダルサラーム大学医学部間で学生および幹部の相互訪問が行われてまいりました。双方向の交流事業も両大学によって立案されており、そのいくつかはすでに実施されております。その成果として、YDM Pehin Hj. Hazair 保健省副大臣が来日し、製薬企業、癌研究センター、こども病院、そして香川大学医学部などを視察いたしました。この訪問は香川大学医学部、ブルネイダルサラーム大学、そして保健省にとって協働の機会をさらに開くものとなりました。

その機会のひとつが香川大学とブルネイダルサラーム大学の共同研究センターをブルネイダルサラームに開設するというものです。このセンターは香川大学、ブルネイダルサラーム大学、保健省が協力し、医学的価値の発見という期待のもと、

豊かな熱帯雨林に生育するハーブや樹木の分析研究を実施することになっていきます。

また、ブルネイダルサラームに一般的な疾患の原因と予防に関する研究もセンターの活動として考えられます。特に食物摂取に関連する病気、食に対する考え方を改め、健康的生活を送る、病気予防、定期健診などが注目されています。さらにこのセンターは国立研究試験機関としての機能を果たすことも考えられます。

また、香川大学のみならず日本の他県からも医師の方をこのセンターに派遣していただくことで日本とブルネイダルサラーム国間の医学交流、知識経験の共有につながることでしょう。

別の可能性として両大学で共同学部を設けることが考えられます。疾病に関する知見を医学の研究開発の観点から比較する、または日本とブルネイダルサラーム国の経験と背景を基盤とした教育を専門とする学部を設けるのです。この共同学部に、香川大学あるいはブルネイダルサラーム大学が、それぞれ交流のある大学に参加するよう呼びかければ、そこが有している国際ネットワークを通じて、さらに業績、知識、その他の関連情報を両大学が共有することが可能となり、ひいては両大学が協力して、増え続ける人間や動物の疾病、環境などの問題の緩和、解決策または治療法を見出すこととなりましょう。このような医学協力から両大学はほかの分野へと進出することが可能となるのです。

間接的とはいえ、今申し上げた観点から、両大学の交流はブルネイダルサラーム国と日本との2国関係を深めてまいりました。

このように両大学はこれからも、先ほど申し上げました目的を達成し両国の繁栄に尽力する健康で協調性のある、意欲的で理解力のある若い世代の育成に寄与されることと存じます。そして、この目標に達する手段方法は多々あることは言うまでもありません。

この協力協働関係は、香川大学、ブルネイダルサラーム大学、関係機関の先見性、進んで協力しようとする姿勢、国際化という重要な取り組みの実現がなければ、不可能でありこれほどの成功を収めることはできなかつたと存じます。

この点におきまして、両大学は人々を啓もうし、相互理解を深め、知識経験の共有、そして若い世代の意識啓発、未来の世代に対する責任感をもたせる上で重要な役割を果たされました。これは両国にとって交流の懸け橋であり、将来の

世代もこの橋を行き来することとなるでしょう。したがって、両大学のような機関は、両国間の良好な関係を構築する上で外交的な役割をも果たしていると言えます。なんといいましても人が国家そのものであり、世界そのものであります。

このような役割を担い、また、先に申し上げました目的に向かっての協力に向けての両大学の取り組み、意欲に対しお喜び申し上げます。

さらに、このような共生的関係がさらなる人類の友好をはかる取組のなかでますます発展し、深化すると確信しております。そして互いを尊重し合い、持つものが持たざる者に分かち合うそのような調和のとれた安らかな暮らしが実現できると確信しております。

まとめさせていただきますと、国際的視野をもつ、開放的な、知識を備えた、タフで、世界のさまざまな試練、自然災害や人災にも賢く、穏やかに対処することができる世代、恵まれない人を思いやり、平和と幸福の共有を進め、後の世代にも責任をもつことができる若い世代を生み出し育成していかなければならないということを申し上げました。またそのような世代は、同時に健康、文化、信念、教育、経済、科学、その他多くの分野を網羅する国際的に共通のビジョンを理解し、評価し、さらに高めることによって、この世界を平和な暮らしを送れる場所にしようと尽力することでしょう。

この点におきまして、香川大学におかれましては、以上申し上げましたことや目的に向かって多大な貢献をされており、また、先に申しましたすべての点で人と人との交流を深めることでビジョンを構築され、革新を進めておられます。そのビジョンと貢献をブルネイダルサラーム国のみならず世界に開かれている香川大学に対し重ねてお喜び申し上げます。

御校そしてこの素晴らしい協力関係の関係者のみなさまは、日本ブルネイダルサラーム国間の利益となる共通のビジョンを目指して更なる交流に尽力されております。みなさまのますますのご成功、御活躍をこころより祈念いたしております。

またこの素晴らしい式典をご準備いただいた方々にもお礼を申し上げます。このような素晴らしい機会をいただき私ども全員感謝しております。

これをもちまして私のご挨拶とかえさせていただきますが、最後に、みなさまのご健勝、ご繁栄、ご成功をお祈りいたしますと共に、私たちが全ての人類のために実践してきた善行に対し神の祝福がありますよう祈りたいと存じます。

ありがとうございました。